

## 金沢 21 世紀美術館効果 —美術館でできるコト、できないコト

金沢美術工芸大学 保井亜弓

美術館の危機が叫ばれている中で、新美術館開館のニュースは多少なりとも希望の光といえるであろう。金沢 21 世紀美術館も、2004 年 10 月 9 日に開館して以来多くのメディアに取り上げられ、注目を集めてきた。工芸をはじめとする伝統文化の町金沢といえば、かつては最先端の現代アートとは縁遠い印象が強かったかもしれない。そのミスマッチ感が開館から 1 年以上を経た今でもおそらく完全には拭えていないのだろうが、それでも確実にこの新美術館は町に定着しているように見える。金沢市の美術館が現代美術を対象とするという方向が決定されて以降、開館前のプレ・イベントとして現代アートを紹介する活発なプログラムが行われ、開館してからは記録的な入場者数が話題となった。金沢 21 世紀美術館の誕生が、当地の美術をめぐる状況に少なからぬ影響を与えたことは疑いない。本発表ではこの 10 年の金沢における現代アートの活動がいかに変化したかを検証する。

実は石川県においては、現在各地で行われているような、地域に現代アートを呼び込むイベントが 90 年代はじめ頃から先駆的に行われていたものの、町おこしの発想のみでは発展が難しくなかなか根付かなかった。しかし、金沢市の美術館建設が具体化するにつれて、状況は大きく変化したように思われる。金沢 21 世紀美術館そのものについては全国的に多くの情報が伝えられているが、ここで取り上げたいのは、美術館開館へと盛り上がるムードを背景に活発化したオルタナティブスペースで展開される現代アートの活動である。たとえば、地元アーティストが立ち上げたアナザームーブメント(2002～)は、美術館のイベントと時期を合わせ、東山茶屋街をはじめとする町の各所でさまざまなスペースを利用して作品を展示し、KAP: Kanazawa Art Project(2002～)は、地元商店街と金沢美術工芸大学等とのアートプロジェクトから始まり、メインストリートのショーウィンドウを学生の作品で彩るオフィス・アートへと発展している。金沢 21 世紀美術館の効果は、このような活動が展開する土壌を拓いたという点にあるといえるだろう。金沢は、北陸の中心的都市でありながら町の規模がさほど大きくなく、大学が集中しているため若者が多く活気があり、文化に対する関心が高い、といった特徴をもつため、昨今話題となる地域連携という観点からもアートが展開する可能性を孕んでいるといえる。美術館と美術館以外で展開するアートが互いに協調しあうことにこそ新たな可能性が見いだせるといえるだろう。金沢 21 世紀美術館がこれからもアートを活性化する磁場として機能していくためには、最先端のアートによって常に刺激を与える存在であり続ける必要があるだろう。

なお本発表は、『石川の文化 2000』(未刊)のためのリサーチと 2005 年度の金沢美術工芸大学における主に実技系学生を対象とした大学院の授業で行ったフィールドワークの調査結果に基づいている。